

酒匂川に棲息する河川型鱒類に就て

大 島 正 満*

桜鱒 *Oncorhynchus masou* (BREVOORT) の河川型のものであるヤマメ（北海道ではヤマベという）と琵琶鱒 *Oncorhynchus rhodurus* JORDAN & MCGREGOR の河川系のものであるアマゴとが同一河川中に棲息する場合、同一水域に混棲するかというと、これを否定する事実が厳存することを報告せねばならぬ。自然状態に於ては、ヤマメとアマゴとは水温に支配されるためであろうその棲息する河川が地域的に定まっているのみならず、両者が同一河川の同一水域に混棲している事実は見当らないので、この二種の交配種が自生したことの報告にも接したことがない。ところが最近著者が親しく酒匂川流域を調査して探知し得たる事実は、従来の知見と著しく異なり興味ある事柄を物語っている。

相模湾に注ぐ酒匂川は国鉄の御殿場線に沿うて流下しているが、その上流に於て御殿場方面の平地に源を發した鮎沢川と、三国峠の南麓を流下する水を集めた馬伏川と抜川との水を併せて小山町に向う水温が少々高い流と、丹沢山塊から流下して来る世附川河内川等の冷たい水を湛えた流とが神奈川県内の谷峨附近で合流し、行く行く丹沢足柄方面からの細流の水を集めつつ山北松田方面へ流下するのであるが、静岡県内の流は富士の裾野を流るるもので冷水を湛うる溪流とはいいい難く、神奈川県内に入つて丹沢足柄の水を併せてからが水清き奔流の様相を呈する。尙一つ特記すべきことは、沼津に於て奥伊豆から流下する狩野川に合流する黄瀬川の水源と、酒匂川に流入する鮎沢川の水源とは、御殿場市内の道路を狭んで南と北とに流れているのであつて、両者の間に分水嶺が存するわけでもなく、大雨到れば溢水が右往左往して二つの流を結合せしむる可能性が充分にある。従つて狩野川と酒匂川とが黄瀬川と鮎沢川とを通じて水源附近で握手した場合が太古の時代から度々あつたことを想像するに難くない。その結果両河の魚族が混交する機会も尠くはなかつたらうと想像される。

動物地理学的に考察すると、北より流下する親潮と、南より来つて本邦太平洋岸を洗う黒潮とが激突する水域即ち東京湾以西の海湾の水温關係が、鮭鱒の如き冷水性の溯河魚の生態に至大な影響を与えたことは当然で、この類の魚族中降海性のものが利根の河口以西にその姿を現わさないのは当然の帰結であるといわねばならぬ。

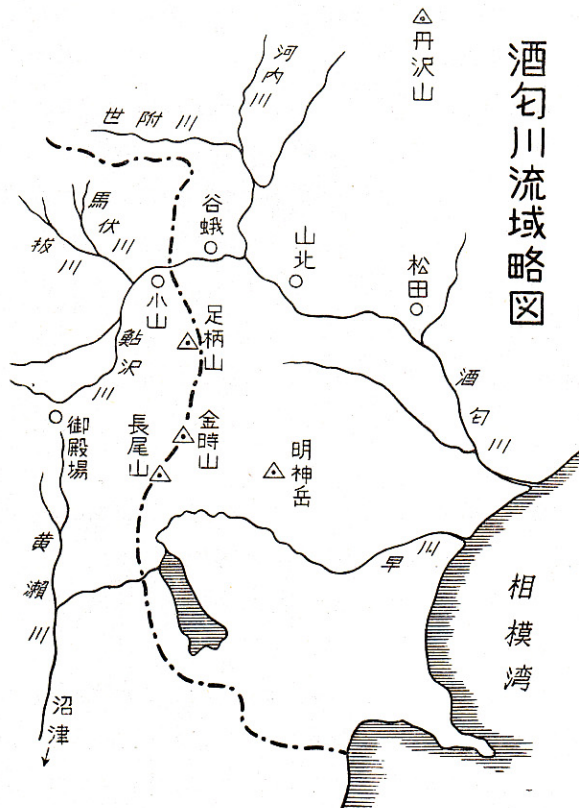
北海道方面が主産地である桜鱒の河川型のもので特に低温の水域を好むヤマメと、それより少々高い水温の水域に陸封されているアマゴとの棲息地域が、相模湾に注ぐ河川と駿河湾に注ぐ河川との分水嶺をなす箱根足柄丹沢等の山塊を連ねる線によつて明確に境されていることは、上記の如き親潮と黒潮との關係が至大なる影響を与えている結果であると考えられる。

琵琶湖々盆の深度大なる冷水域で肥大する琵琶鱒の河川型のものであるアマゴが、木曾川に於けるものが冬季水温が下降する伊勢湾に降り、産卵期に河鱒として溯上するのを見る以外何処の河川

* 東京都目黒区中根町180

に於ても決して降海しないのは、河口附近の海洋の水温が黒潮の影響を受けて高きに過ぎるためであろうと考えられるが、それかあらぬか関東に於ては、相模川、酒匂川、早川等はヤマメが棲息する河川であるのに一步函嶺を越ゆれば、狩野川、富士川、興津川、安倍川等の上流は俄然アマゴが棲息する水域となる。

扱て従来の常識からいえば、丹沢山塊から流出する冷水を湛うる世附川、河内川等の流が集つて主流となる酒匂川は当然ヤマメが棲息する水域と思われる。事実神奈川県内に於ては酒匂川は本支流ともヤマメが姿を現わすのに、谷嶺を過ぎ県境を越えて一步静岡県内に入ると同じ酒匂川の最上流である馬伏川、抜川、鮎沢川等に於てはヤマメは全く影を潜め、アマゴが代つて主魚となる。丹沢に入漁する釣客達は該方面にはアマゴは絶対に見当たらないというし、静岡県内では狩野川に合流する黄瀬川は勿論のこと、御殿場附近の諸流はすべてアマゴが棲息する水域でヤマメは全然見当らぬ。



水温の点からいえば酒匂川の上流は静岡県内の平地を流れ温度が少々高い部分と、丹沢山塊より流下する冷水を受けて水温が急降する部分とに分れる。前者にはアマゴが定着繁殖し、後者にはヤマメが定住するのであつて、この二種が同一水域に混棲しないことは確実である。発現の系統を異にするヤマメとアマゴとが同一河川に如何にして姿を現わすようになったかといへば、アマゴ本来の棲息水域である黄瀬川と鮎沢川その他の静岡県内に於て酒匂川の源をなす諸流とが相近接し、それ等の間に劃然たる分水嶺が無くて出水の際には凡てが合流する可能性が充分に存し、古来より両水系の魚族が混交し得たことがその因をなすといわねばならぬ。尙考え得べきことは近時琵琶湖産小鮎の河川放流が手広く行われそれに乗じて湖産のアマゴが思いもよらぬ水域に搬入されて繁殖しつつある实例も尠くないので、全国的に稀な例である酒匂川のアマゴは、小鮎と共に放流されたものが生存に適する水温の部分に溯上定着してヤマメとは別個に生活しているものと考えられないこともない。

孰れにしても同一河川に然も歴然たる分布の境界線に跨つている水域にヤマメとアマゴとが共存している類例は他に全然見当らぬ特例である。斯の如き事実が存することを公表せば、変異性を云為する学者は凱歌を挙げ、ヤマメの体側に現わるる黒点やアマゴの体側に現わるる朱点の如きは環境に左右せられて現わるる変異的性質であつて種を分つ特徴とは認め難く、同じ河川の水温の異なる場処に両者が別個に繁殖していることは、環境に支配せらるる変異性を如実に物語つていると速断するであろうが、アマゴの本拠である狩野川と主としてヤマメを産する酒匂川との太古に溯つての地理的關係に思を致し、ヤマメとアマゴとの分布の境界線が歴然として存することを考うれば、その反撃は根拠がないことを察知することができると思ひ、滋賀県醒ヶ井養鱒場に於て同一環境同一条件の下に飼育した北海道産桜鱒の稚魚と琵琶鱒の稚魚とがそれぞれヤマメとアマゴとに分化成育した事実も変異説が成り立たぬことを物語る。

本研究に際し静岡県内に於ける酒匂川上流の資料採捕に関しては、御殿場病院長勝田博士の助力にまつところ多く、酒匂川本流のヤマメ採捕に就ては神奈川県立足柄病院長片平重次博士が多大な助力を与えられた。茲に附記して両氏に深甚なる感謝の意を表する。

Résumé

**Ecological Studies on the Freshwater Salmon
found in Sakawa River**

M. OSHIMA, M. A., D. Sc.

(With 1 Text-figure)

In examining a large number of specimens of the stream type of Cherry Salmon, *Oncorhynchus masou* (BREVOORT), and Biwa Salmon, *Onchorhynchus rhodurus* JORDAN & MCGREGOR from various localities in Japan proper, the writer came to the conclusion that there is a distinct line of demarkation dividing the area where the both salmon inhabit.

In the east, mountain range of Hakone which separates the streams to Sagami Bay from those to Suruga Bay is its starting point. From there it runs northward dividing the tributaries of Sagami River and Fuji River and bends to the west extending to the north of Lake Biwa. The central mountain range which divides the countries bordering Japan Sea and the Inland Sea is the western part of the line of demarkation in Japan proper. Except in Kiushiu, all the rivers entering the Pacific and Inland Sea contain red-spotted 'Amago', river form of *Oncorhynchus rhodurus* JORDAN & MCGREGOR while those in the north and east of the line contain black-spotted 'Yamame', the river form of *Oncorhynchus masou* (BREVOORT). Notwithstanding the existence of such a fact, the writer found quite recently an exceptional case in the tributaries of Sakawa River which enters into Sagami Bay. One of the upper stream of that river contain 'Amago' only, coming down from the footsteps of Mt. Fuji in Shizuoka Prefecture, while the other which flow down from the interior of Ashigara and Tanzawa mountains in Kanagawa Prefecture contain 'Yamate', not mingling with the former.

In the present paper, the reason of occurrence of such extraordinary phenomena is discussed, mainly from the geographical point of view, affirming the possibility of intrusion of 'Amago' into the proper habitats of 'Yamate', due to the nearness of headwaters of Kise River and Ayuzawa River.

Hearty thanks are due to Dr. Hiroshi KATSUTA of Gotemba Hospital and Dr. Juji KATAHIRA of Ashigara Hospital for their efforts to make collection of the specimens in Sakawa River.